

日本におけるTh.リット教育学受容の研究
—日本教育学説史再考の試み—

小 笠 原 道 雄

A Study on the Reception of Th. Litt's Pedagogy in Japan: An Attempt of Reconsidering
the Japanese History of Educational Theories

Michio OGASAWARA

This study considers, as a form of receiving German pedagogy in Japan, how the pedagogy of Theodor Litt (1880-1962) has been received in the development of pedagogy in Japan: that is, what elements of Litt's thoughts and theories have interested Japanese educational researchers, been studied and received, from the standpoint of "the history of reception and inference". The study deals with literature and transactions of researchers from the beginning of the 1920's to 2010, for 90 years. The total number of the literature about Litt in Japan is approximately 250 (monographs, articles, translated books, items in dictionaries and others). While Litt-studies have been made in the fields of sociology, philosophy and ethics as well as pedagogy, this study confines itself to pedagogy. The subtitle, "An Attempt of Reconsidering the Japanese History of Educational Theories", reflects the fact that recent studies on "academic pedagogy" after the 1920's in Germany indicates significant errors in the understandings of Japanese reception of German pedagogy.

The outline of the study is: Introduction; 1) The Reception of German Pedagogy as Preconditions of that of Th. Litt's Pedagogy; 2) The Reception of Th. Litt's Pedagogy and its Development; and 3) Conclusion.

キーワード

テオドール・リット Theodor Litt, ドイツ教育学 German Pedagogy, 教育理論の受容 Reception of Educational Theories, アカデミック教育学 Academic Pedagogy, 日本教育学説史 the Japanese History of educational Theories

所属

広島文化学園大学 Hiroshima Bunka Gakuen University

学芸学部 Faculty of Arts and Sciences 子ども学科 Department of Childhood Studies

はじめに

テオドール・リット (Theodor Litt) は、1880年12月27日、ドイツ・デュッセルドルフに生まれ、1962年7月16日、ボンで生涯を閉じた20世紀を代表する哲学者、教育学者である。

本稿は、そのTh. リットの教育学が日本の教育学の発展の中でどのように受容されてきたのか、あるいは、リットの思想や理論の何が日本の教育学研究において関心と呼び、研究の対象とされ、受容されてきたのかを「影響・作用史」研究の立場から、日本におけるドイツ教育学の受容の一形態として考

察する。一応、考察の対象の時期を1920年代初頭から2010年迄の約90年間に限定し、その状況を人物の交流や文献を中心に考察したい。この間、日本においてリットに関する文献数(著書、(紹介を含む)論文、翻訳書、事典項目等の全領域を含める)は、「目録」等の研究、調査によれば、全体で約250点程度である。尚、日本ではリットについての研究は、教育学の領域だけではなく、社会学や哲学、倫理学の領域に及ぶが、今回は、考察の対象を教育学の領域に限定した。また、今回特に、本論の副題として「日本教育学説史再考」と付したのは、最近のドイツ教育学(史)の研究において(注1)、ドイツ本

国における研究の傾向とその成果からドイツ「アカデミズム（大学）教育学」という一般化の問題、つまり、ドイツの各大学によって、研究のスタイル、研究の対象、方法にかなりの独自性が顕著であり、その「一般化」が極めて問題を孕んでいることが明らかになったからである。とりわけ、1920年代以降の「アカデミズム（大学）教育学」に関しては、各大学の置かれた「地域性」に起因する「特徴」、あるいは「独自性」が顕著である（周知のようにドイツの大学は州立で各州が財政負担を担っている）。それにも拘らず、依然としてわが国では、『ドイツ教育学』一般として紹介され論述されている（論者自身もそのように表記してきたが）。今回、日本における「ドイツ教育学」の受容過程の分析に際し、その一般化による考察の方法を、特に回避する必要性を痛感して、論者はこのような副題を付した。従ってリットの教育学は、同時に、当時のライプツィヒ大学の哲学・教育学を代表する傾向であり、方法であったことをここで強調しておきたい。尚、ライプツィヒ大学は2009年創立600年を記念した伝統あるドイツ大学の一つで、ザクセン州（州都はドレスデン）に属する。ライプツィヒ市は、ヨーロッパにおける商業、文化等東西・南北交流の中心地で、特に、印刷業等出版業に関してはヨーロッパのセンターでもある。また、バッハの音楽に代表されるように宗派的には、プロテスタント（新教）ルター派の土地柄である。ドイツ学研究の基本として、地域性と宗派性（両者は強く結合している）を特に意識する必要があることを強調しておきたい。

1 リット教育学受容の前提としてのドイツ教育学の受容

ドイツ教育学の日本への受容や展開（「Rezeption der deutschen Pädagogik und deren Entwicklung in Japan」）¹⁾について、論者は、2005年7月2日、ブラウンシュヴァイク工科大学からの名誉哲学博士（Ehrendoktor）授与の記念講演で、人物交流（日本からの国費留学生やドイツからの招聘教授等）の観点から、約120年にわたる状況を「影響・作用史」の観点から報告した（注2）。要約すれば、状況は次の通りである。

1) 日本の教育学は欧米の教育学の移植に始まり、特にドイツ教育学の潮流と密接な関係をもって発展し、後年の日本の教育学のあり方に深い影響を与えた。その起源は1881年で、明治政府内での政変を契機として、「ドイツ一辺倒の風潮（Deutschlandversessenheit）」が生まれる。この政変とは、伊藤博文と岩倉具視を中心として、明治政府内部の民権派を駆逐し、立憲制の実現をめざす一種のクーデタであった。文部大臣井上毅が「ドイ

ツ学（die deutsche Wissenschaft）」の奨励策を打ち出したのは、「保守ノ気風ヲ存セシメン」ためである。1875年にはじまる文部省貸費留学制度のもとで、政変後、ドイツにおもむく留学生が急増し、明治の文部省留学生の80%がドイツにおもむく。井上毅の思惑どおり、「ドイツ学（die deutsche Wissenschaft）」は官学の中樞を占め、日本近代史上における画期的な現象、いわゆる「ドイツへの傾斜」が進行する。また「ドイツ一辺倒の風潮」とは、ドイツという歴史風土の中で育まれた学術や技術、すなわち「ドイツの諸科学」を移植することによってわが国の近代化を推進しようとする政策に連動する風潮である。

2) 日本におけるドイツ教育学の受容は、この明治政府の意図的な政策転換と軌を一にする明治20年代、ドイツのヘルバルト派の影響を強く受けた時期に始まる。具体的には、ヘルバルト派のドイツ人教師 E. ハウスクネヒト（Hausknecht, E., 1853-1927）（注3）の文科大学（東京帝国大学の前身）への招聘である。このことによって、明治政府は、教育制度の整備そのものをドイツの公教育をモデルとしてすすめようとしたのである。ハウスクネヒトと並んで当時ドイツ教育学を学び、わが国教育学の理論の展開に寄与したのが大瀬甚太郎（1865-1944）である。大瀬はハウスクネヒトに学び、1891年には『教育学』を著わすが、それはヘルバルト派の「学校教育学（Schulpädagogik）」を中心として整理したものであった。大瀬はその後1893年には、教育学研究のためフランス、ドイツに留学し、特にベルリン大学で Fr. パウルゼン（Paulsen, Fr., 1846-1908）の教育学、C. シュトンプフ（Stumpf, C., 1848-1936）の心理学、J.I. フォルケルト（Volkelt, J. I., 1848-1930）の哲学や教育学などを聴講し、さらにイェナ大学では W. ライン（Rein, W., 1847-1927）の教育学、R. オイケン（Eucken, R., 1846-1926）の倫理学を傍聴し、1897年帰国した。注目すべきは大瀬にみられるように、この時期の留学生は、ドイツの各大学にみられる「個性」や「特色」を無視して、百科全書的に「ドイツ学」を丸呑みして受容している点である。他方、1886年、ドイツに留学していた野尻精一（1860-1932）が帰国、1890年より94年迄、（東京）高等師範学校においてヘルバルト主義の教育学を講じた。先のハウスクネヒトの教え子（谷本、湯原、稲垣等）によるヘルバルト教育学説の展開と並んで、以後、わが国におけるヘルバルト主義の全盛時代が約十数年間続くことになる。更に1910年代より、教育問題を自然科学的思考から取り扱うものとして「実験教育学（Experimentelle Pädagogik）」の学説が W. ライ（Lay, W. A., 1862-1926）、や E. モイマン（Meumann, E., 1862-1915）の翻訳を通じて紹介され、これまた

わが国の教育学研究の一潮流をなした。

3) 1913-1926年の大正年代における教育学の主流は、1897年以降の自然科学主義の批判として現れる。それは近代の教育学説の実証的傾向を批判し、同時に、近代教育に対する理想主義に基づく解釈を加えるものである。自然科学主義の傾向を批判し、教育の理想主義的解釈を提供した学説としてR. オイケン (Eucken, R., 1846-1926) の思想と関係する「人格教育学 (Persönlichkeitpädagogik)」や「新カント派 (Neukantianer)」の思想、特に、P. ナトルプ (Natorp, P., 1854-1910) と関係する教育学説が注目される。ナトルプはすでに明治30年代に『社会的教育学 (Sozialpädagogik)』を通じてすでに知られていたが、この頃から新カント派の教育学論として彼の著作は新しく見直されることとなった。『社会的教育学』に続いて、『哲学と教育学 (Philosophie und Pädagogik)』、『一般教育学 (Allgemeine Pädagogik)』が盛んに読まれ、翻訳も続いて出版された。このナトルプの教育思想を中心として、この派の理想主義的教育学を大成した書物が篠原助市(1876-1957)の『批判的教育学の問題』(1922)である。本著は、日本で最初の教育学理論を構築した書として高く評価されている。さらに、ナトルプ研究を通じて、ナトルプのペスタロッチー (Pestalozzi, J. H., 1746-1827) 解釈が知られ、これを介して新しいペスタロッチー研究がわが国において成立する。その代表的著作として長田新(1887-1961)の『ペスタロッチーの教育思想』(1927)や福島政雄(1889-1976)の『ペスタロッチーの根本思想』(1934)が出版され、わが国における「ペスタロッチー運動」の理論的・思想的基盤を形成した。この大正年間、わが国では「大正デモクラシーの思潮」のもとアメリカの教育学、特に、J. デューイ (Dewey, J., 1859-1952) の理論が再考され、教育学説として重きをなす。このような流れの中で、1920年以降、W. デイルタイ (Dilthey, W., 1833-1911) の教育思想の系譜につながる「精神科学的教育学 (Die geisteswissenschaftliche Pädagogik)」に属する人々の教育学説が、「文化教育学 (Kulturpädagogik)」として盛んに論じられるようになった。この後、30年代初頭迄のわが国教育界は、この教育学説によって彩られた。このように、大正期(1913-1926)の思潮は「理想主義的ドイツ哲学に属するもの」からやがて、自然科学に対する「文化科学」、自然主義に対する「文化主義」が力説され、「文化と教育との関連」が教育学研究における重要なテーマの一つとして注目されるようになったのである。その先駆となったのは、(著作としては)入沢宗寿(1885-1945)の『文化教育学と新教育』(1925)であり、乙竹岩造(1872-1953)の『文化教育学の新研究』(1926)

であり、長田新の『現代教育哲学の根本問題』(1926)であり、それが入沢宗寿の『デイルタイ派の文化教育学』(1926)、海後宗臣(1901-87)の『デイルタイの哲学と文化教育学』(1926)に結実する。この派のドイツ教育学説はさらにEd. シュプランガー (Spranger, Ed., 1882-1963) とリットを中心に「文化教育学」あるいは「精神科学的教育学」の研究として展開され、戦後の1960年代に至る日本における教育学研究、特に、大学(アカデミズム)教育学において主流を形成してきた。

何故に日本でこれほどまでに強力な「文化教育学」の隆盛をみたのか。それは、わが国におけるアカデミズム教育学の形成と関係する。小西重直や篠原助市、やや遅れて長田新等は、「学校教育学」を中心とする当時の教育学への批判とその克服を志向する。具体的には、ヘルバルト派の「学校教育学」への批判を、当時の欧米諸国の「新教育」の理論を媒介して提示し、主張したのである。その際、批判・克服の基盤を哲学、すなわちドイツの批判主義哲学や生命哲学に求め、教育学のあらたな学問的構成を意図したのである。もう一つ当時の日本の教育界の動向がこれに絡む。1924・25年頃から「教育学は文化教育学たるべし」としたわが国教育界は、1926年に入って、それまでも底流として潜んでいた国粹主義、極端な日本文化重視の傾向が次第に台頭してくる。これらの風潮に対して、普遍的なヒューマンズムを基本とする「文化教育学」が特に強調され、重視されたのである。(概略的なこの期の特徴については、生松敬三著『現代日本思想史4—大正期の思想と文化』(青木書店、1971)の第四章、「文化主義・教養主義・人道主義」を参照されたい。)

2 リット教育学の受容

以上考察して来たように、リット教育学の受容は、わが国の教育学における1920年代の「文化教育学」の受容を前提とし、とりわけデイルタイ派の代表的人物として受け入れられる。30年代もこの傾向が持続する。それを象徴的に示しているのが、当時わが国で学術的に最も権威のある書店として知られる岩波書店から『岩波講座 教育科学』²⁾が1931年より刊行されるが、その第1冊の付録であった雑誌『教育』の口絵にデイルタイ、シュプランガー、リットの三人の写真が掲載され、編集後記に「口絵は毎回の配本内容に関係深い主な学者の肖像を掲げ、その面影を通して(読者に)学説とともに一層の興味を深める一助ともしたいと考えている」と記されたことである。当時の日本の教育界の三者に対する関心の深さが伺われよう。

1) 論文・著書による Th. リット紹介

ところで、わが国でリット教育学に関して、リットの文献を直接引用して論究した最初の論文は、1923年2月、伊藤歎典、元台北帝国大学教授（旧台湾）の「教育学方法論」である。本論文は、京都帝国大学文学部哲学科の機関誌『哲学研究』（京都哲学会）第8巻1月2月号の二回に亘って掲載された。中でも2月号（83号）では、リットの論文「教育学（Pädagogik）」（Systematische Philosophie, 1921, S.276 ff.）と「教育学的思考（Die Methodik des pädagogischen Denkens）」（Kant-Studien, Bd.XXVI Heft 1-2, 1921, S.17 ff.）を翻訳し、引用しながら、リットの説を紹介している³⁾。ただ、ここで注目しておきたいのは、伊藤が教育学の「学としての方法論」への関心からリットに着目していたことである。これは又、当時のわが国の教育学の重要関心事でもあった。つまり、この問題は、ヘルバルト以後の教育学において、科学としての「教育学」の自律を巡る核心的問題でもあった。1923-24年、長田新も同じ機関誌『哲学研究』（第8,9巻）で「文化教育学の出るまで（1）（2）」の論文を寄せている⁴⁾。ここでの長田は、文化教育学の出現を人格的教育学との関係から考察し、「文化教育学はただ人格を文化本質（Kulturwesen）と解し、したがって、教育の問題をこの文化本質としての人格の教育にむけた」としている。その上で、Ed. シュプランガーと相並んで現代文化教育学の一頭目とも見るべきリットが「まず、教育学見地より主観と客観との本質的關係を明らかにし、以て自らの文化教育学的立場を示すと同時に（この）問題にも答えようとした」と述べている。その根拠として、長田はリットの論文「現代の文化（Die Kultur der Gegenwart, Teil I）」（1921）の289ページを引用している。さらに長田は、文化教育学の主張の為には、人格と文化の関係を価値哲学や文化心理学の方向から考察しなければならないとして、シュプランガーを中心に論じているが、「科学と陶冶」の問題に関しては特にリットをとりあげ、彼に従えば「教育活動の本質は主観と客観との特殊な共同（Ineinander）である。」とし、「文化教育学が陶冶の本質を哲学的に考察し人格的要求に対して客観性を正義づけた」と結論している。最後に、文化哲学によって基礎づけられる陶冶理想の問題に言及し、リットが1919年に公刊した『個人と社会（Individuum und Gemeinschaft）』において、「文化哲学的見地から個人と社会の相互関係を教育上本質的に基礎づけた」と結論づけている。この長田の論文から、この時期におけるわが国のリット理解のレベル（どのようなリットの著作や論文を読んでどのように理解し把握していたのか）や関心（リットから何を学びたかったのか）等をうかがうことがで

きよう。その後、長田の教育学研究がわが国に於けるリット研究に極めて大きな影響力を及ぼすことになる。尚、長田は、1928-1930年にかけて、ライプツィヒ大学に留学、リットのもとで研究を重ねることになる。帰国後の1931年、長田は『独逸だより—再遊記—』を刊行し、その198-207頁において「リット教授のこと」を記している。ここで長田が、「シュプランガーとリット」の両者には「可なり顕著な対比」があり、リットとの会話の中で彼自身「シュプランガーをシュライエルマッヘルとすれば、余はヘーゲルである。」と言ったなどは、「両者の学風を表はして餘りある」と記している。この長田の記述は極めて重要である。ここには明治期の留学生とは異なり、長田は対象（者）を客観的に評価し、位置づけしているのである。ただし、長田においても「学風」の相違が学者個人の気質に還元される点が気になる。本論の趣旨から言えば、リットの動的思想構造と歴史的コンテクストとしての当時のライプツィヒ大学哲学・教育学教室との交差連動において両者の差異を把握する必要がある。

次にこの時期、1925年から1940年代にかけて最も多くその著書や論文でリットに言及した研究者に入沢宗壽（東京帝国大学教授）がいる⁵⁾。入沢もドイツ・ライプツィヒ大学に留学し、リットと面識がある点に注意したい。入沢は、著作『文化教育学と新教育』（1925）、『教育思想問題講話』（1926）において数多くリットに言及しているが、同年『ディルタイ派の文化教育学説』⁶⁾においては、25頁に亘り「リットの教育学説」を紹介している。また入沢は、『文化教育学と体験教育』（1926）においてもリットを取り上げている。この時期、リットの個人名を冠した論文に、小林（石山）修平の「リットに於ける現代哲学と陶冶理想との関係」（1926）、村上俊亮の「リットの哲学と文化教育学」（1927）、竹井弥七郎の「テオドール・リットの教育学と文化教育学」（1927）等があるが、それらは次の村上俊亮・海後宗臣共著『リットの文化哲学と教育学』（1928）⁷⁾の前段をなすものである。わが国における本格的なリットの紹介は、村上・海後共著からと考えてよい。

2) 本格的な Th. リット紹介

本著『リットの文化哲学と教育学』の冒頭に両著者の恩師、吉田熊治（東京帝国大学教授）が「序」をよせている。その「序」は本著の構成、内容を実に的確に示していると共に、リットに関する当時のわが国の理解状況を良く著わしている。曰く、「Litt は Spranger と共に文化教育学者の双壁であることは、広く教育界に知られている事実であるが、直接に Litt の学説を調査研究する資料のほとんど翻訳されていないことは、原書を使用し得ざるものの久

しく恨事とした所である。Littのドイツ語は頗る古典的のもであって、美文ではあるが極めて難解である。それが為にLittの論著にして邦文で紹介されたものは極めて少ないのである。しかるに（今回）村上、海後の両学士に依ってLittの哲学思想と教育学説とが纏めて解説せられたことは、我が教育界に取りて大いなる福祉と言はざるを得ない⁸⁾と。その上で、「Littの思想学説の根本を述べたものは『認識と生活 (Erkenntnis und Leben)』及び『個人と社会 (Individuum und Gemeinschaft)』の二著である」と述べ、「本著の第一章は『認識と生活』の骨子を紹介し、第二章は『個人と社会』のほとんど全体の解説であり、そして、第三章はLittが別に公にした所の「教育学 (Pädagogik)」の詳細なる紹介である」と本著が使用した文献とその構成を明示している。その上で、「本著の如く原著に即して正確にかつ忠実にLittの思想学説を叙述せるものは何処の国にも無いと思う」として、「本書の価値は極めて大である」と評価している。「序」の結びにおいて、吉田は、「文化教育学の思潮の正統派とも言うべきものはシュプランガーにあらずしてむしろリットであると思う。(略) 大体においては（リットは）ディルタイの思想学説を継承祖述して居ると考える」とリットの立場を示している。この吉田のリットのディルタイに対する位置関係の判断は村上、海後の両著者の判断とも考えられる。村上もその「序文」で「シュプランガーはディルタイの正統の後継者をもつて自任しているけれども実際はリットの方がよりディルタイの思想に近い」⁹⁾と判断している。尚、村上は「(当為と存在、理想と現実、個人と社会等の) 諸関係の本質及び本質に基づく普遍的関連を体験の具体的内容充実に即して捕捉せんとするものがリットの文化哲学である」と判断している。その上で、リットの文化哲学の基礎をなすものが、その構造論と価値論であるとし、本著「第一章で構造論と価値論を、そして第二章で文化哲学概要を述べた」と記している。第三章は海後が担当、「教育学」を第1節現代の教育学、第2節教育学の原理、第3節教授上の諸問題の三節構成で論じている。すでに吉田が述べているように、本章はリットの著書『教育学 (Pädagogik)』(1924)のほぼ忠実な翻訳に基づく諸説の「紹介」といった性格のものであるが（ここにはリットの諸説に対する批判とか評価はなされていない）、これまでわが国で「つまみ食い」的に紹介されてきたリット教育学の問題（関心）領域、それに対する理論的アプローチの方法が全体的に明瞭になったと考えられる点で、本著は評価される。しかし、日本における本格的なリット研究は、その後第二次大戦後の1954年、杉谷雅文の『現代哲学と教育学』の刊行まで26年待たな

ければならなかった。無論、この間にも数多くのリット紹介がなされるが、中でも特に注目したいのは、以下の『教育学事典』に「Theodor Litt」の項目が設けられ記述されたことである。(1) 入沢教育事典(1932)、(2) 増訂教育学事典(1935)、(3) 岩波書店・哲学小事典(1938)、(4) 岩波書店・教育学事典(1939)。また、テーマ的に広がりを持った紹介論文としては以下のものが注目される。(1) 宗像誠也「リット、公民教育における国家の理念と現実 (Litt, Idee und Wirklichkeit des Staates in der staatsbürgerlichen Erziehung)」(1931)、(2) 重松俊明「我、我—汝、社会—Th. リットを中心として—」(1932)、(3) 加藤三郎「テオドールリットの全体観について—主として『指導か放任か (Führen oder Wachsenlassen)』を中心として—」(1933)、(4) 入沢宗寿「リット、国家社会主義的 (ナチス) 国家における精神諸科学の位置 (Litt, Die Stellung der Geisteswissenschaften im nationalsozialistischen Staate)」(1934) 等である。

3) わが国における本格的なリット研究

わが国における本格的なリット研究は、私見ではあるが、1954年刊行された杉谷雅文の著書『現代哲学と教育学』においてである¹⁰⁾（もっとも、杉谷は本著「まえがき」で本書完成に18年を要した事を述べているように、本著は、大戦末からわが国の敗戦という社会的な大混乱のなかで、しかも研究条件・生活条件の極めて厳しい条件下で執筆され、完成されたものである。本著はまた杉谷の博士論文でもある）。論者がここで特に、単なる紹介とは異なる「本格的なリット研究」というのは、杉谷がリットの主要文献を徹底的（正確）に読み込み、リットの思想の全体像とその思考様式を十分に把握した上で、著作を構成し、論究しているからである。結論的に、「本著はリットの教育学を歴史的に又方法論的に論究したものである。とくに、第二章はリット教育学の方法論を、生命哲学、現象学、弁証法、形而上学の諸点から詳論したもの」と述べている（第二章 リット教育学の方法論 第1節 リットにおける生命哲学、現象学、弁証法、形而上学の関連と構造 第2節 現象学と教育学 第3節 弁証法と教育学 第4節 個性の形而上学と教育学 第5節 個性の理解と教育学）。杉谷は長田の弟子として、新カント派、ディルタイの生命哲学を学び、さらに、ヘーゲルの弁証学、ジンメル社会学、フッサールの現象学そしてハイデッガーの実存哲学迄巡りそれらを自己の思想の中核に据える実にドイツ哲学の王道を我がものとした教育学者であった。これら杉谷の学問研究の背景が精緻でかつ体系を持ったリット研究を可能にしたのであろう。

ところで、杉谷がリット研究に参入し、かつ問題意識を展開させた中核的な要因は何であったのであろうか。私見ではあるが、おおよそ以下の三点を指摘できよう。(1) 当然ながら、大学における教育(哲)学教授として、研究対象として「教育学の基礎付け」、「学としての自律」あるいは、「教育活動の本質の究明」等への関心をもち、それを通しての研究者養成、特に、第二次大戦後のアメリカ教育学、なかでもデューイの経験主義教育に対するアンチテーゼとしてのリット研究、(2) 60年代日本に顕在化する社会主義的・共産主義的運動と連動する教育界(教職員組合、学会も含む)の動向に対する警鐘と反発として、(3) 教師養成と現職教員のための教育学教育の基礎理論としてのリット教育学である。論者自身、9年間(大学4年、大学院5年)にわたり杉谷の講義、演習(当時大学の3年時にリットの『指導か放任か(Führen oder Wachsenlassen)』を「原書講読」として読むのが慣例になっていた)、特別研究に参加、そして博士論文の指導を受けた。今、上記の事柄が彷彿としてよみがえるのである。杉谷は気質的には実に激しい人であった。その後、杉谷は、長田が監修する西洋教育史の一巻として、1956年『リット』を刊行する¹¹⁾。その「まえがき」で杉谷は、「リットは多くの現代教育学者のうちで、一番するどい歴史的な感覚の持ち主である。その彼がその教育学の中に展開している諸問題を、現代的な意義のもっとも鮮やかな、また、最も鋭いと思われるものを中心にまとめてみたのが本書である」と述べている。そこから杉谷の考えるリット教育学の『現代的意義』がわかる。研究上特に論者が本著において注目するのは、巻末にあげられた「リットに関する参考文献」である。ここで杉谷は、リットの入門書としてA. レーブレ(Reble, A.)の『テオドール・リット(Theodor Litt)』(1950)をあげ(本著は今日にいたるもドイツ本国でも標準的なリット入門書として位置づけられている)、さらに「個人と社会(Individuum und Gemeinschaft)」との関係についてリットの弁証法的見解を明らかにし、これに評論を加えたものとしてフランスの研究者J. ヴュイルマン(Vuillemin, J.)の『人間と労働(L'être et le travail)』(1949)をあげていることである。杉谷は本著が「個人と社会との関係についてのリットの弁証法的な見解を明らかにし、これに評論を加えたもので、リットの社会哲学に批判を加えたものとして注目に値する」と述べている。(無論、その他、H. ピクスベルク(Pixberg, H.)の著書『社会学と教育学(Soziologie und Pädagogik)』(1923)やR. レーマン(Lehmann, R.)の著作、『現代の教育的運動(Die pädagogische Bewegung der Gegenwart II Teil)』(1923)、さら

には、1955年刊行のシュプランガーの『教育学的展望(Pädagogische Perspektiven)』を挙げているが)。杉谷はこのようにリット研究の動向を本国ドイツだけではなく、当時すでに、ヨーロッパ全体にも目配りしていたのである。杉谷はドイツ語(とにかく、ドイツ語の読みの深さは驚くばかりであった)、英語そしてフランス語にも堪能であった。その一端として、杉谷にはリット著『生けるペスタロッター(Der lebendige Pestalozzi)』(1952)¹²⁾の優れた翻訳(邦訳1960年刊行)があるが、翻訳刊行の意図として、すでに述べた60年代日本の教育状況が色濃く反映している。それは当時の文部省と日教組の対立抗争をめぐる組合運動の持つあまりにも過度な政治的運動に傾斜する態度に対し、教育研究者の良心から、教師ペスタロッターをして語らしめたものである。杉谷は異例とも思われる長文の「解説」を施し、その中で「ペスタロッターは『集団的生存の要件』と『個人の要求』との対立の二律背反的性格を明確に承認し—(略)—その緊張に直面してもなお正しく身を持した唯一の人物」と教育者の在り方を火の出るような語調で述べているのである。

さて、60年代以降わが国で取り上げられたリット研究には大きく二つのテーマがある。一つは、リット政治教育思想であり、もう一つは、広くリットの人間学に関するものである。前者を代表するものとして、前田 幹の「Th. リットにおける政治教育思想」(1968)、実松宣夫の「政治教育の本質と課題—Th. リット政治教育思想—」(1977)、さらにその批判的展開としてのパートナーシップ(Partnerschaft)論に言及する平野智美の「リット政治教育論」(1973)、そして最近では、宮野安治「リット政治教育思想の研究(1)—文化教育学における「ナショナリズム」問題—」(1994)、「リット政治教育思想の研究(2)—ヴァイマル期の公民教育論—」(1996)等があげられる。60年代はわが国の教育状況もまさに「政治の時代」で「国家と教育」(国家による教育の支配)の問題が先鋭化していた。後者、人間学に関する論文としては、宮野安治の一連の研究が注目される。宮野には(1)「リットにおける自然と人間」(1976)、(2)「テオドール・リットの哲学的人間学—陶冶論との関連において—」(1977)、(3)「現代哲学と人間学」(1978)、(4)「リットにおける思考と人間」(1980)等がある。周知のように、この時期、ドイツでも日本でも、「人間学」と「教育学」、つまり「教育的人間学」のテーマが学会でも盛んに論議されていたのである(注4)。この問題にリットの人間学の立場から発言したのが、一連の宮野の論考であった。論述の特徴は、戦後リットの著作、論文を使用しながら併せて当時のドイツにおけるリットに関する研究書、研究論文

にも目配りをして数多くの論文をまとめていることである。これら宮野の人間学研究で特に論者が注目したのは、基礎文献として（これは戦前のリットの文献であるが）、リットの『生命界における人間の特殊な地位（Die Sonderstellung des Menschen im Reich des Lebendigen）』（1942）を利用し、リットの人間学の特徴・立場を正確に把握し、提示したことである。後述するように、その後も宮野は、人間と自然の関係を軸に、「リットの人間学と教育学」の論究を重ね、人間学的観点からリットの全体像を解明し、2001年京都大学から博士号を取得している（宮野安治：『リットの人間学と教育学—人間と自然の関係をめぐって—』（2006））。さらに、前田 幹の「文化教育学基礎論—Th. リットを中心として—」（1966）から始まる一連のリットに関する論究も注目される。尚、前田には未刊行の博士論文「テオドル リットの人間学と教育学」（東北大学、1974）がある。全体的に、orthodoxy なリット研究と評価される。その他、全国学会誌に掲載された論文を四点紹介したい。（1）西 勇の「リットにおけるパースペクティヴィズム（Perspektivismus）の成立—Leipniz との関連をめぐって—」（1972）の論文を先ず挙げておきたい。リットはライプニッツ（Leipniz, G., 1646-1716）を「ドイツの哲学的世紀の先駆者」と評しているが、そのライプニッツの「遠近法主義（Perspektivismus）」への批判を通じて、自己の「弁証法的遠近法主義」を定位した。このリットの思考は、初期の主要著作『歴史と生命（Geschichte und Leben）』（1917）、『認識と生命（Erkenntnis und Leben）』（1923）、『個人と社会（Individuum und Gemeinschaft）』（2. Auflage, 1924）で展開されているものである。従って本論は、リットの文化哲学や人間学等の理論的体系や方法論的展開の中核を形成した「遠近法主義」の本格的論究として注目される。（2）鈴木 聡「教育における伝統と未来：拘束と自由をめぐむ問題—G. ヴィネケンと Th. リットを中心に—」（1985）。本論文は、第一次大戦後ドイツにおける青年運動の教育思潮と文化教育学との間の「伝統と未来」、「強制と自由」という二つの主題に関わる教育原理上の対決を抉りだすことを課題としている。その際、青年運動から G. ヴィネケン（Wyneken, G., 1875-1964）が、文化教育学からリットが、言わば代表選手として取り上げられたのである。従って、本格的なリット研究とはいえないが、1980年代のわが国教育界での論争の一つにリットの思考が取り上げられた点に注目したい。（3）新井保幸「リットのナチズム批判」（1982）。本論文は、わが国におけるリットのナチズム批判を本格的に考察した注目すべき論文である。新井は自己の関心として、シュプランガー、W. イエーガー（Jaeger,

W., 1888-1961）、H. フライヤー（Freyer, H., 1887-1969）が「ナチズムにどのように対応したか、またそれはどういう理論にもとづいていたか、という点にある」とし、その作業の一環として、リットの場合を検討するとしている。この問題を検討するために新井は、リットの二つの論文を使用している。一つは、「大学と政治（Hochschule und Politik）」（これは1931年10月31日、リットのライプツィヒ大学総長就任演説（Rektoratsrede））であり、もう一つは1934年の論文「国民社会主義国家における精神科学の地位」である。前者の論文では、大学と学問への政治の干渉に整然とかつ力強く抗議するリットの批判精神が、ナチズムに対しても見事に貫かれている、と新井は述べ、また、後者の論文では、リットがナチズムを3論点（精神科学におけるナチズムの非正当性、人種学（Rassenkunde）について、ナチズムの歴史の恣意的解釈について）において的確に、ほとんど反論できないまでに論破した、と新井は判断している。これらの論究を経て、リットのナチズム批判の方法上の特質として、「ナチズムの論理的弱点を衝くことによって、間接的にナチズムを否定するところにあった」と新井は結論づけている。ロゴスに徹したリットを新井はこの二つの論文から見事に摘出している。（4）小笠原道雄論「ディルタイとリット—日本におけるリット理解から見たディルタイ教育学の展開」¹³⁾。本論は、日本ディルタイ協会創立20周年としておこなわれたシンポジウム「ディルタイ教育学の展開—多様性・変容・危機—」の報告である。本論で論者は、ディルタイとリットとの関係あるいはその系譜を逆の視点、つまり、リットから逆照射してディルタイとの関係を捉える方法を取った。つまり、日本におけるリット研究、あるいはリット理解を通じてディルタイ教育学との関係の考察をおこなった。論点の項目は、1. 考察の諸前提として、（1）リット哲学の思考方法の原理としてのディルタイ哲学、（2）初期作品群にみられディルタイの影響、2. 初期リット哲学の前提、3. リットにおける文化哲学理論の形成—構造論と価値論の関係から—、4. 20年代初頭の文化教育学とリット、5. リット理解からみたディルタイの教育学理解の同調と克服、まとめ、である。尚、本シンポジウムでは、坂越正樹が「ディルタイとノール」、田代尚弘が「ディルタイ教育学の受容—ディルタイとシュプランガー—」、野平慎二が「ディルタイ教育学と批判性」のテーマでそれぞれが報告した。

4) 文献目録・翻訳書にみられる Th. リット

この領域では、詳細な「日本における Theodor Litt 文献目録」（1956年迄）¹⁴⁾を作成し、リット研究者として論文「歴史と教育のあいだ—テオドール

ル リット教育説の一素描」(1953)を書き、かつ、出版事情のきわめて困難な時期に、リットの『科学、陶冶、世界観 (Wissenschaft, Bildung, Weltanschauung)』, および『指導か放任か (Führen oder Wachsenlassen)』の二冊を翻訳・刊行した石原鉄雄の業績も忘れられない。尚、リットの翻訳書に関しては、上記、杉谷、石原以外に『近代の倫理学 (Ethik der Neuzeit)』(邦訳書『近世倫理学史』)が1956年、関 雅美によって、さらに、1988年、荒井 武/前田 幹の共訳で『現代労働社会とドイツ古典主義の陶冶理念 (Das Bildungsideal der deutschen Klassik und die moderne Arbeitswelt)』(3. Auflage, 1964)(邦訳『現代社会と教育の理念』)が、そして小笠原道雄による1996年翻訳・出版した『技術的思考と人間陶冶 (Technisches Denken und menschliche Bildung)』の合計6冊がある。ただこの数は、盟友シュプランガーの翻訳書32冊に比べ極端に少ない。その原因はなにか。基本的には、1936年から37年にかけて日独交換教授と来日し全国各地で講演活動を行ったシュプランガーとのキャリア上の差異が挙げられるが、ごく単純に言えば、リットの文章の難解さ、とりわけ、表面的には、ドイツ語表現の難しさにある。この難解なリットのドイツ語を読みこなし、その緊張した思考の筋道を会得するのは、日本人にとって実に変なことになる。しかしながら、より本質的な点は、リットのロゴス (Logos) に徹したその動的な思考構造と歴史的コンテクストに置ける諸脈絡の動向とを交差連動させる鋭い「歴史意識」(解釈学の巨匠 H.-G. ガーダマー (Gadamer, H.-G., 1900-2002) をして「当代最も鋭い歴史意識をもつリット」と言わしめた)の把握が極めて困難なのである。杉谷のリット研究に惹かれ、多くの学生がリット研究を志したが、ほぼ全員が挫折し、他の研究テーマに鞍替えをした。語学力に関していえば、今日わが国では大学におけるドイツ語の習得の問題があると同時にドイツ教育学に替わる実証研究中心のアメリカ社会学が教育学研究の中核を形成している。従って、リット研究あるいは広くドイツの教育学研究を志す後継者の育成は極めて困難な状況にある。しかし、より本質的な問題は、現代のグローバル化社会におけるドイツ教育学研究の影響力の喪失、かつての1920年代から1960年代迄にみられたその研究の影響力、評価が極端に減退したことによるのではなからうか。基本的には、多発する教育問題に対する解決の正確な「手段 (科学的手法)」を駆使出来なかったことにあるのではないか。それは、「解釈学的教育学」の運命として表現されようか。あるいは『精神科学的教育学』の終焉といえるのであろうか。

5) 日本の学会における Th. リットの評価

1963年、日本教育哲学会は機関誌『教育哲学研究』第8号(1963)¹⁵⁾で、1962年6月17日に逝去したテオドル・リット博士を追悼して、特集号を組み、巻頭に晩年のリットの遺影が飾った。尚、教育哲学会は2007年創立50周年を迎えたわが国でも伝統のある専門学会である。その機関誌は本年までに102号が刊行されているが、この間、個人を追悼した特集は三度である。シュプランガー(1964年)と初代学会長稲富栄次郎博士(1976)、そしてわがテオドル・リットの三名だけなのである。この事実は、日本の教育学会、とりわけ、教育哲学会において、いかにテオドル・リットが尊敬され、教育哲学研究にとって重要な人物であったかの証左であろう。追悼号では、杉谷雅文が論文:「リットの現代教育学に対する貢献」で条理を尽くしリットの業績を述べ、「82年の永い生涯において、新カント学派、生命哲学、現象学、弁証法、実存哲学などの広い学問的巡礼をしつづけて、ドイツや他の国々に大きな影響を与えたリットも今やあの世にあって、高いところから地上を見下ろし、そこに彼の残した業績を人類共通の共同遺産と見なし、もはや『それは私のものだ』、などとは言わず、神と共にほほえんでいるのではあるまいか」¹⁶⁾と結んでいる。また、学会長の稲富栄次郎は「リット教授の思い出」において、1956年6月16日、ボン大学で行われたリットの講演「自然科学的認識について」の模様やその後リット教授との会見の内容を紹介し、その印象をもとに、「純学問という点からすれば、リットは確かにシュプランガーを一步抜きこんでいたといつてよいのではなからうか」¹⁷⁾と評価している。そして最後に、鈴木謙三編集幹事が「リットの経歴・著作目録」をボン大学のFr. ニコリン (Nicolin, Fr.: ボン大学でリットの助手を勤め、後にデュセルドルフ大学教授)の作成した二つの著作目録に基づき、「それを補足し、不明な点はすべてボン大学に問い合わせ作成し」¹⁸⁾、それを掲載している。尚、鈴木も当時ボン大学に留学し、直接リット教授にお会いしている。

6) 最近の全体像をもった Th. リット研究

(1) 西方 守の『リットのエデュケーション哲学』。本著は、著者が2000年3月に東北大学から授与された博士論文「テオドル・リットの弁証法的教育哲学研究」を骨子とした論文である。本著の特色は、リットの弁証法的教育哲学の「弁証法」の特徴を、リット的主要著作を丁寧に解説し、さらに、ドイツのリット研究者 W. クラフキ (Klafki, W.), J. デルボラフ (Derbolav, J.), R. ラサーン (Lassahn, R.) の諸論文の吟味を通じて解明し、続いて、「Th. リットの人生と著作」を W. クラフキの『Th. リットの教

育学 (Die Pädagogik Theodor Litts)』(1982) に依拠して論述されている点にある。原著の構成は、1. 序論, 2. 教育学の方法論, 3. 人間観と教育(1), 4. 人間観と教育(2), 5. 出会いと教育, 6. 自己認識と教育, 7. 自然科学 - 科学技術 - 産業社会と教育, 8. 民主主義と政治教育, 9. 結論の9章で、ほぼ、リットの生涯にわたる問題関心とリットの著作順に従った論及がなされている。論者は、教育哲学会の依頼を受け、学会誌で長文の「書評 (Rezension)」を行い、「原著が論及の内容・方法および研究の質の両面からも、高く評価できると」と判断をした。1954年の杉谷雅文著『現代の哲学と教育学』に継ぐ、現代日本におけるリット研究と評価される。ただ原著にみられる西方の論究では、リットの思考方法・内容がほぼ著作順にパターン化されて説明され、記述されているので、リットのもつ思想構造の動性や歴史的コンテクストにおける解明がなされていない点が気になる。

(2) 宮野安治の『リットの人間学と教育学 - 人間と自然の関係をめぐって -』。原著は、著者が30年にわたるリット研究をまとめ、京都大学に提出し、2001年に受理された博士論文である。特に、著者は、「哲学的人間学」「テクノロジーと教育」「政治的陶冶への思考」のテーマに重点をおき、「巨大なリット思想の把握解明に努めてきた」と本書「あとがき」で述べている。何故に、これらのテーマが重点化されるのか？それは、原著の序論「リット研究の視座」で明確に示されている。宮野は、リット思想の成立・展開をリットの著作や当時の時代状況の中でのリットの諸活動等から考察している。結論的に宮野は、リットの思想にはナチス期を挟んでヴァイマル期と第二次世界大戦後とでは、大きな変化が認められる、と断定している。すなわち、リットの思想行程を、ナチス期を過渡期として、大きく「前期」と「後期」とに分けることができる、としている。この宮野の断定を促す根拠として、H.-O. シュレンパー (Schlemper, H.-O.) 著『反省と形成意志。Th. リットの作品における陶冶理論、陶冶批判 (Reflexion und Gestaltungswille. Bildungstheorie, Bildungskritik und Bildungspolitik im Werke von Theodor Litt)』(1964, S.14) 及び、F. ニコリン (Nicolin, F.) 編：『教育学と文化 (Pädagogik und Kultur)』の「あとがき」(1965, S.104 und S.109) を引用している。これらの考察から、宮野は、今日的な関心からも、また、リットの主要著作である『人間と世界 (Mensch und Welt)』や『思考と存在 (Denken und Sein)』をも含み入れた全体的で本格的な研究、つまり、後期リットの「哲学的人間学・人間陶冶論」という根本的な枠組みの解明を、とりわけ「人間と自然の関係」という問題関心を軸

に解明し、そこに生じている問題について検討するのが本書のねらいであるとしている。原著は第一部「哲学的人間学の構想と展開」、第二部「人間陶冶論の新構築」の二部から構成され、現代の科学技術に伴う陶冶の根本問題をリットに寄り添いながら展開し、同時に、M. ヴェーバー (Weber, M., 1864-1920) や M. ホルクハイマー (Horkheimer, M., 1895-1973), Th.W. アドルノ (Adorno, Th. W., 1903-1969) 等の現代思想にも目配りをして考察している。全体的に、原著は、リットの晩年の思想において展開されている人間学および教育学を、現代の人間の問題、そしてそこで展開される人間陶冶の問題に対するリットの回答の書ともいえよう。尚、宮野にはドイツ語による論文「日本におけるリット受容の過程 (Der Prozess der Littrezeption in Japan)」(1983) があることを付言しておく。

7) 最後に1982年の新井保幸の先駆的な論究があるが、今日なおわが国リット研究で欠落している基本的テーマに「ナチズム」問題があることを指摘しておきたい。ドイツ本国であれば持続的に議論され、徹底的なロゴスとエートスに徹した抵抗者としてリットが研究されているにも拘らず、わが国ではこのテーマは等閑視されてきた。論者自身は「精神科学的教育学派」の研究の今日的課題 (中心の問題と考えているが) として、この問題の重要性に鑑み、1972年「1930年代に於ける『科学的教育学』の一考察—その問題の所在—」¹⁹⁾ においてリットとナチズム問題の考察の重要性を指摘した。さらに、1975年にはその基礎的研究として、リットの『国家権力と人倫性 (Staatsgewalt und Sittlichkeit)』(1946) の考察を中心に論文「国家権力と教育—Theodor Litt の国家観の考察 (1) —」²⁰⁾ として論究したが、あまりの難解さに挫折を余儀なくされて来た。ただこの「Th. リットとナチズム問題」のテーマはその後論者の脳裏から離れることはなく、持続的に「教育思想家と戦争責任」の問題として展開してきた。その一端が2006年1月、日・独共同研究の成果として『軍国主義と国家社会主義における教育学—日・独の比較— (Pädagogik im Militarismus und im Nationalsozialismus—Japan und Deutschland im Vergleich)』(Julius Klinkhardt) ²¹⁾ として結実した。この問題に関しては、最近ライプツィヒ大学リット研究所から数多くの「遺稿」等の『資料』が公表されてきているので、ナチズム期並びに第二次大戦後ソ連の支配をうけた旧東ドイツのライプツィヒ大学でのリットの行動と思想を中心に「教育思想家の戦争責任」の問題を中心に論究を進めたい。

まとめ

1) リット研究における対象テーマ、関心の変化。全体的に、日本では、60年代を節目に、リット研究のテーマ・対象の変化が窺える。具体的には、初期リットの「教育学方法論」(学理論)の関心から、後期リットの人間学研究、さらには、自然科学と人間陶冶、労働世界と人間陶冶、技術的思考と人間陶冶、そして、政治教育への問題関心の移行である。その移行期におけるリットのナチズムとの距離の取り方の問題も日本における教育学者の戦争責任の問題と絡んで、関心が高くなってきた。この変化の背景として、60年代以降の日本における政治的対立の厳しい状況、社会状況、特に産業構造の大きな変化があり、それに強いインパクトを受けた教職員、教育学者の関心の変化が大きな要因となっている。具体的に、政治状況に関していえば、戦後わが国の教育界における、教職員組合(日教組)と政府(文部省)の対立、抗争が激化し、多くの教職員を巻き込んだ労働運動が展開された。その際、進歩的教育学者と称するグループは日教組の教育運動理論の中心となって大きな影響力を及ぼした。他方、保守的(あるいは、伝統的)な教育学者は文部省の側に加担して、カリキュラムの改訂、道德教育の「特設」化に中心的役割を果たした。ただ、多くの教職員、教育学者はこの対立、抗争の中で、悩み、苦しみ、自己の教育的立場を「模索」した。そんな中で「心ある」教育関係者のなかで注目された翻訳書(1960年刊行)が、前述のリット著『生けるペスタロッチー—三つの社会教育学的省察—』であった。この日本語版翻訳書の表紙にはこう書かれている。「今日、親や教師のなかで本当に教育の意味と重大さを自覚している人が幾人いるであろうか。数多い教育書の中で、教育の真の意味と方向とについて、また教育者の喜びと悲しみとについて、これほど深く掘り下げたものは、けだしこの本が初めてである」と。このように、翻訳書を通じたリットのわが国教育界にあたえた間接的影響は、決して軽視されるべきではない。その他、1971年刊行の『指導か放任か』、1988年刊行の『ドイツ古典主義の陶冶理想と現代の労働世界』、1996年刊行の『技術的思考と人間陶冶』もそれぞれその時々時代の状況の中で注目された。尚、人間学研究への発端は、1960年代の旧西ドイツにおける「教育的人間学(Pädagogische Anthropologie)論争」(O.F. ボルノウ(Bollnow, O. F., 1903-1991)とH. ロート(Roth, H., 1906-1983)の間で交わされた論争)が強く影響していることを付言しておく。

2) (1) 日本の教育学説史研究といった視点からリット教育学の受容を考察した場合の問題点。

現在のドイツ本国における研究状況から判断すると、リットは、「文化教育学」一般、あるいは、「ディルタイ学派」を代表する一人として位置づけられ、その思想、理論が紹介され、「受容」されたことの問題がある。1920年、リットがEd. シュプランガーの後任として、ライプツィヒ大学の哲学・教育学教授として就任するが、その教授選考過程をみるに、当時のドイツ大学における「アカデミック教育学」に科せられた州政府からの『課題』が存するのである。具体的には、「教員養成」に係わる「教育学」教授の役割である。従って、この問題は、当時(1920年代)の大学の諸政策と制度の問題としてさらに考察されなければならぬ問題である。その様な状況の中で、一つの特徴をもったライプツィヒ大学哲学部の教育学教授の役割が存した点をリットの強烈な個性共々考察されるべきである。わが国では、リットの「生活(Das Leben)」がほとんど考察されていない点も大きな問題点である。

2) (2) 1920年代にライプツィヒ大学のリットのもとに留学した日本の教育学研究者の受容態度。

(1) 長田新の場合: 長田は1928年から29年にかけてリットのもとに留学している。(2) 入澤宗壽もライプツィヒ大学に留学し リットと面識を持っている。注目すべきは、(3) 心理学者の城戸幡太郎も1924年から25 年にかけてライプツィヒ大学に留学していることである。これら三者のライプツィヒ大学に置ける研究やその受容、さらに リットからの影響関係の詳細な研究は、その後の日本における三者の活動からも重要である。三者の留学時期、期間、そして留学時の年齢等も特に重要である。年代的にすでに各自の「教育学」観を形成している場合があるからである。

3) リット研究で今日必要とされている課題(私見)

(1) 民主主義に定位した「政治教育」の問題。2010年10月開催の第14回テオドル リット シンポジュームのテーマ「自由と生活秩序(Freiheit und Lebensordnung)」は、今日のヨーロッパ諸国が当面する切実な問題で、とりわけ、青少年の育成と言った点から民主主義に定位する「政治教育」の必要性が再確認されたのである。Th. リットはナチ時代を生き抜き、さらに、第二次大戦直後のソヴィエト連邦の支配する(旧東)ドイツでの体験から、自由とそれに基づく生活秩序の維持する体制としての民主主義に定位する「政治教育」の重要性をいち早く主張した。今日、この問題は、大戦直後の次元とは異なるが、新たな層面として、わが国に取っても、極めて時機にかなった重要な課題である。戦後60年を経て、今日、日本では、形式化(制度化)された表面上の「民主主義」だけが言われ、実態は、経済至

上主義を中心とする我欲中心の勝手気侭な生活現実が横行し、今やその生活スタイルが全ての領域に蔓延している。真に国民一人一人の主體的な「民主主義的思考」が内面化され、「民主主義的实践」が社会生活面で行われているか？との深刻な反省がなされている。

(2) 教師養成に対するリットの見解

戦後アメリカ型の「教師養成」制度を導入してきた日本では、社会状況の大変化（家族制度、少子化等）もあって、今日、理念、制度、カリキュラム、方法等、全ての面で「行き詰まり」の状況に陥っている。教育制度の抜本的改革の中でも教師養成の根本的な改革が必要とされている。第二次大戦直後の一時期、リットは、当時ソヴィエト連邦の支配する旧東ドイツのライプティヒ大学で教師養成学部、すなわち、「教育科学部」の創設・設計に係わるが、ソヴィエト指導部の反対で挫折し、それが引き金となって故郷の西ドイツ・ボンに移住し、ボン大学に「教育科学研究所」（教育科学部）を創設し、教育学教授として復帰したのである。

注

(注1) 具体的には、最近のドイツの各大学における「研究所の歴史（ゼミナール史: Institutsgechichte）」あるいは、詳細な「講義題目（Lehrveranstaltung）」の調査・研究である。Klaus-Peter-Horn, Heidemarie Kemnitz (Hesg.) ; Pädagogik Unter den Linden—Von der Gründung der Berliner Universität im Jahre 1810 bis zum Ende des 20. Jahrhunderts, 2002.

A G I n s t i t u t s g e s c h i c h t (Hesg.) ; Erziehungswissenschaft an der Eberhard Karls Universität Tübingen, 2010.

ライプティヒ大学におけるリットの活動に関しては、Wolfgang K. Schulz ; Untersuchungen zu Leipziger Vorlesungen von Theodor Litt, 2004. Karen Gaukel ; Bericht aus dem Theodor-Litt-Archiv, In: Theodor-Litt-Jahrbuch 2009/6. 等を参照。

(注2) Michio OGASAWARA ; Die Rezeption der deutschen Pädagogik und deren Entwicklung in Japan. In: Jahrbuch für historische Bildungsforschung. Bd.11 (2005), Bad Heilbrunn, S.283-298.

(注3) 1887年、ドイツ人ギムナジウム教師であるハウスクネヒトは明治政府の招聘によって、東京帝国大学の前身校である文科大学に置いて日本で最初の教育学講義を行った。ハウスクネヒトはベルリンのフリードリヒ・ヴィルヘルム大学（ベルリン大学）で学んだ後、ベルリンのギムナジウムの教師を経て、来日した。1887-1890年間、彼は、東京帝国大学で教育学（正確には教授学）を講じた。彼の講義は、ヘルバルト（Herbart, J. F., 1776-1841）並びに、ヘルバルト派の教育学に基づくもので、その際、教材としてラインの教科書が使用された。彼の講義の受講生には、谷本 富、湯原元一、稲垣末松等がいた。彼らは後に、中等学校教員（師範学校教員）として、ヘルバルトの理論を基礎に教育学を講じた。従って、教師養成機関では小学校教員養成のための『教授法』としてヘルバルトの教授段階説（現在わが国では、「指導案」の作成に際して、「導入・展開・総括」の3段階が在るが、ここにはヘルバルトの五段階教授説の尾てい骨が残っているのである）が導入された。このようにして、日本におけるヘルバルト並びにヘルバルト派教育学の伝搬・普及がなされたのである。尚、来日したハウスクネヒトについては、寺崎昌男／樽松かおる論「エミール・ハウスクネヒト研究」、『日本の教育史学』（教育史学会紀要、第22集）、講談社、1979年参照のこと。

(注4) 論者はドイツでの議論について、いち早くわが国の学会に報告した。拙論「教育学的人間学の問題点—H・ロートの『教育学的人間学』を中心として—」, 教育哲学会編『教育哲学研究』第19号（1969）, pp.16-30。さらに、H. ツダルチール（Herbert Zdzardil）: Pädagogische Anthropologie. Studien zur Kategorialanalyse der Erziehung und der Erziehungswissenschaft, (1972) の「書評」として、「教育人間学の新段階」のタイトルで紹介した。上智大学編『ソフィア—西洋文化ならびに東西文化の交流—』第22巻第1号, 1973, pp.77-80。

参考・引用文献

（本論がドイツ教育学の内容であるので、独文形式で表記し、文末にドイツ語によるレジюмеを付した）

1) Michio Ogasawara, Die Rezeption der deutschen Pädagogik und deren Entwicklung

- in Japan. In: Jahrbuch für historische Bildungsforschung. Bd.11 (2005) , Bad Heilbrunn, S.283-298.
- 2) Iwanami-Lektion, "Erziehungswissenschaft (Beilage) ", 1931, Tokyo.
 - 3) Hakanori Ito, Die Methodik der Pädagogik, In: Zeitschrift "Studien der Philosophie", Zwei Heft des 8. Jahrgang, 1923, Kyoto.
 - 4) Arata Osada, Die Geburt der Kulturpädagogik (1) , (2) , In: Zeitschrift "Studien der Philosophie", 93, 94, Zwei Heft des 8 und 9 Jahrgang, 1923, 24, Kyoto.
 - 5) Munetoshi Irisawa, Kulturpädagogik und Reformpädagogik, 1925, Tokyo.
 - 6) derselbe, Die Theorien der Kulturpädagogik der Dilthey'schule , 1926, Tokyo
 - 7) Toshiaki Murakami/Tokiomi Kaigo, Kulturphilosophie und Pädagogik von Litt, 1928, Tokyo.
 - 8) Kumaji Yoshida, 'Vorwort', In: Kulturphilosophie und Pädagogik von Litt, 1928, S. 2 f.
 - 9) Toshiaki Murakami, 'Vorwort', In: Kulturphilosophie und Pädagogik von Litt, 1928, S. 3.
 - 10) Masafumi Sugitani, Philosophie in der Gegenwart und Pädagogik, 1954, Kyoto.
 - 11) derselbe, Litt, Tokyo, 1956.
 - 12) Masafumi Sugitani/Hisao Sibatani (die gemeinsame Uebersetzung) , Ikeru Pestalozzi (Japanische Uebersetzung von "Der lebendige Pestalozzi") , 1952, Tokyo.
 - 13) Michio Ogasawara, Dilthey und Theodor Litt —Entwicklung der Pädagogik Diltheys im Lichte des Verständnisses von Th. Litt in Japan—, In: Dilthey-Forschung , Heft 17 (2005/2006) .
 - 14) Tetuo Ishihara, Literaturlist von und über Theodor Litt in Japan (1956) , In: Erziehungswissenschaft. Berichte der Pädagogischen Hochschule Wakayama, Heft 7, 1958.
 - 15) Japanische Gesellschaft für Erziehungsphilosophie (Hrsg.) , Studien der Erziehungsphilosophie, Heft 8, 1963, S.109-146.
 - 16) ditto. S.109-120.
 - 17) ditto. S.121-123.
 - 18) ditto. S.124-146.
 - 19) Michio Ogasawara, German "Scientific Pedagogy" in the Nineteen-Thirties, In: SOPHIA, Sophia University, Vol.21, No.4, 1972, P.61-68.
 - 20) Michio Ogasawara, Staatgewalt und Erziehung — Betrachtungen über Theodor Litts Staats— (japanische) , In: Sophia University Studies in Education and Psychology, No.10, 1975, S.79-91.
 - 21) Horn/Ogasawara/Sakakoshi/Tenorth/Yamana/Zimmer (Hrsg.) , Pädagogik im Militarismus und im Nationalsozialismus— Japan und Deutschland im Vergleich—, Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn.

Resümee in deutscher Sprache

Im 10. Theodor-Litt-Symposium im Jahre 2006 habe ich einen Vortrag über das Thema “Die Rezeption der Pädagogik von Theodor Litt in Japan” gehalten. Dabei habe ich betont, dass insbesondere die Kulturpädagogik unter den deutschen damaligen „Pädagogiken“ intensiv akzeptiert wurde, die zur sozialen und kulturellen Situation sowie zum damit verbundenen Bildungszustand in den 1920er Jahren in Japan gepasst hat. Bei meinem Vortrag wurde festgestellt, dass vor allem die „Theorie der Kulturpädagogik der Dilthey-Schule“ (1926) den Japaner ins Auge gefallen ist, und dass Dilthey, Spranger und Litt als Repräsentante ihrer Schule angesehen wurden. Hierbei fand ich bemerkenswert, dass die 1920er Jahre als Gründungszeit der japanischen „akademischen Pädagogik“ bezeichnet werden können, wo die „Wissenschaftstheorie der Pädagogik“ für wichtig gehalten wurde. Als Folge meiner Untersuchung wurde schließlich unterstrichen, dass die japanischen Pädagogen ihre Aufmerksamkeit auf Litt wegen seiner Wichtigkeit für die Methodologie der wissenschaftlichen Pädagogik gerichtet haben.

Im letzten Vortrag habe ich hauptsächlich versucht, eine Vogelperspektive für die etwa 110 jährige japanische Geschichte der Rezeption der deutschen Pädagogik von der Meiji-Zeit (1868-1912) über die Taisho-Zeit (1912-1926) und die Showa-Zeit (1926-1989) bis 2010 herzustellen. In diesem Bericht möchte ich, im Gegensatz dazu, den zeitlichen Gegenstand auf die etwa 90 jährige Geschichte von den 1920er Jahren bis 2010 begrenzen und den japanischen Forschungszustand über Theodor Litt beschreiben. Ich werde hierbei mit meinem Kommentar berichten, aus welchem Interesse und mit welchen Themen Litt in Japan geforscht wurde und wird. Zum Schluss werde ich meine persönliche Meinung darüber auf Grund dieses Berichtes äußern, wie die Litt-Forschung zur Problemlösung der japanischen Gesellschaft heute beitragen könnte.